



「真に豊かな社会」の創造を目指して

工学研究科長・工学部長
青葉工業会会長 **金井 浩** (通昭56)

前研究科長の内山 勝先生の後を引き継ぎ、平成 24 年 4 月より工学研究科長・工学部長に就任し、青葉工業会会長を拝命いたしました。一年前の未曾有の大震災で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復興を祈念しております。また、被災地で復興に向け日々努力されている皆様に心より敬意を表する次第です。青葉山キャンパスも少なからぬ物的被害を受けました。これまでお寄せ頂いた青葉工業会の会員各位からの多くのご支援に深く感謝申し上げます。

震災直後は、従前の勉学・研究環境を取り戻すべく皆奔走いたしました。大きな混乱もなく、学生達の冷静沈着な行動にも特筆すべきものがありました。その後、仮設研究棟や実験設備が整備され、平時同様の運営を取り戻しました。大きな被害のあった 3 学科の研究棟・講義棟も平成 26 年までに免震機能を加えて新築されます。

震災直前には、平成 22～23 年のセンタースクエアプロジェクトが完成し、購買とブックカフェからなる BOOOK（ブーク）と中央棟（食堂と上階の事務室、大会議室、大講義室）の 2 棟が青葉山キャンパスを透明感のある斬新な景観に変化させました。青葉山キャンパスの西側では、地下鉄東西線（平成 27 年開業予定）青葉山駅の周辺に、レアメタル・グリーンイノベーション研究開発拠点と災害科学国際研究所（平成 24 年 4 月発足）の研究棟が平成 26 年に完成します。

本学は、開学以来、研究第一主義、実学尊重を理念とし、近代日本の隆盛と持続的発展を牽引し、世界に先んじ科学技術の地平を拓いてきました。しかし近年、研究者や専門家が対峙すべき課題には、地球環境問題、化石資源の枯渇、グローバル化、少子高齢化、ものづくりの衰退等が山積しています。さらにこの大震災で、従来の工学では、安全安心な社会の構築を達成できなかったということが厳然たる事実として突き付けられました。

そもそも工学とは、物質的な豊かさの探究に加え、安全安心、健康・福祉、さらに「真に豊かな社会」の創造を目的とする学問です。特にこの震災体験によって得られた教訓から、本学部・研究科の教職員・学生・卒業生の皆さんは、社会に貢献していかなければという強い使命を抱くようになりました。今後、長い歴史の中で培った英知と技術を礎に、人類が抱える大きな課題の根本的な解決に役立てていけることと思います。

この課題解決に当たり、同窓会の役割も重要になります。東北大学工学部同窓会はかつて「工明会」と呼ばれておりました。新制大学発足時に仙台工専と東北大が合併したことにより、仙台工専の同窓会である SKK 同窓会と工明会が大同団結し、昭和 31 年新たな同窓会としてこの「青葉工業会」が発足し、創立 56 周年になります。その後、工明会は、青葉工業会からの支援の下、工学部教職員と学生の親睦会として存続し運動会などの行事を毎年開催しています。

この青葉工業会は、工明会、学内会員との連携のみならず、学科・系の同窓会および全学同窓会である東北大学萩友会（平成 19 年発足）との連携を進めております。同窓会にとって、工学部・工学研究科等の同窓生・教員が、ネットワークを形成できるように支援することが重要な仕事です。そのため、支部総会・クラス会・同期会の開催支援、先輩が後輩にかかる特別講演会の開催、会員とニュースの刊行、会員データベースの整備、会員名簿発行（最近では平成 22 年発行、4 年ごと発行）、会員の再就職支援など、会員サービスの充実に努めたいと思います。

これらの事業は、会員の皆様の名簿情報と会費（正会員、学生会員ともに年 3000 円）に基づいて行われております。今後も諸先輩のご努力や会員の皆さんの結束力と協力で、青葉工業会の目的にもありますように、技術者集団である「会員の親睦を図り」、「我が国工業の進歩発展に寄与し」併せて「後進の誘益に務める」ことを進めたいと思います。

青葉工業会へのますますご理解とご支援をお願いします。

薫風

震災後の教育体制復旧状況

工学研究科副研究科長（教育担当）
土木工学専攻 教授 **田中 仁** (土昭 54)

大震災より約一年を経て、工学部・工学研究科においても復旧・復興が着実に進んでいます。ここでは、教育面での状況についてご報告致します。まず、震災から約一ヶ月後に予定されていた 4 月からの新学期の開始にあたり大きな変更を余儀なくされました。4 月の入学ガイダンス・オリエンテーションについては全学的に歩調を合わせることとなり、連休明けの 5 月 6 日に入学ガイダンス、同 7 日に在学生オリエンテーション、5 月 9 日から講義を行うこととなりました。例年の入学ガイダンスでは工学部全体の学生を一箇所に集めて実施してきましたが、これを行わずに、学科レベルで実施しました。キャンパス内の建物が震災の影響を受けているため、講義を行う教室の安全性を確認することは、講義計画を立てる上でもっとも重視すべきことのひとつでした。このため、都市・建築学専攻教員および同専攻所属学生による応急危険度判定がなされました。この献身的なボランティア活動に従事した学生に対して、後日、研究科長名で感謝状が授与された。

また、春学期の開始が遅れ、さらに複数の学科において教室が使えない状況があることから、今学期の間に 15 回の講義のコマ数を確保することには困難を伴いました。そこで、一部の講義を川内北キャンパスで開講し、さらに、土曜日にも講義を配置しました。また、津波の被災地域には多くの学生がボランティア活動に参加しており、大学院前期課程「生命倫理」の授業の一部にはボランティア活動を組み入れるなど、教育上の新しい取り組みも行われています。

なお、平成 24 年度の入学ガイダンス・オリエンテーションは例年通りのスケジュールで行われることとなりました。さらなる教育の拡充に向けて、今後とも皆様方のご支援をお願い申し上げます。